

法然和語文献の研究

——西本願寺蔵 長祿四年写本『往生要義抄 并十二問答』

禅勝房教化 因縁集』について——

伊 藤 真 宏

一、はじめに

法然（一一三三—一二二二）は、日本が生んだ宗教家として、思想家として、最も偉大な一人であると評価されてよいであろう。その法然の思想を知るのに重要な書物が『選択本願念仏集』（以下『選択集』と略す）であることは、異論の余地がない。しかし、法然の思想を知るのに、『選択集』のみでよいか、と問えば、否、というべきであろう。

法然には『選択集』の他にも、さまざまな文献がある。特に和語の文献、例えば手紙であるとか、講義録、弟子の手に成る伝記など、その思想や人となりを知るに十分な文献が存在する。中でも代表的な和語文献の筆頭に挙げられるのが、了慧（一二三四—一二三〇、一説一二三二—寂）の編纂した『和語燈

録』であろう。

『和語燈録』は、本編五卷、拾遺二卷の全七卷に、都合三十三編の法然の和語の文献を収録したものである。了慧は、法然、聖光、良忠と次第する、いわゆる浄土宗鎮西派の第三祖良忠の弟子で、『和語燈録』の他、『選択集大綱抄』『聖光上人伝』『然阿上人伝』『無量寿経鈔』等の著書がある。『和語燈録』は、文永十二年（一二七五）に成立し、了慧存命中の元亨元年（一二三二）に開版された。その元亨版が龍谷大学に現存している。版本とはいえ、編者存命中の開版であり、しかも、その「印本」（版木に刻印するものになる本）を、了慧自身が、老眼の目をぬぐいながら書いたと、跋文に記されており、『和語燈録』の成立や記述内容に関して、比較的信頼性が高い。

しかしながら、個々の法然の和語文献に関して、『和語燈録』

に所収されるそのすべてが検討され、信頼性が確立されているか、といえは、必ずしもそうではない。和語の法然文献をもつて、法然浄土教思想の鑑とすることは、いまだ躊躇せざるを得ない、という現状がある。一刻も早く、法然和語文献の信頼性が確立されなければならないのである。

法然の言葉は、さまざまな形で今日まで伝えられてきた。和語文献は、対機要素が濃く、それだけに、法然の信仰的態度というか、信仰上の方向性や心情が反映されていて興味深い。ただ、個々の文献では論理的であつても、文献間では、教義的に整合性が保たれていない場合もあり、論理的な矛盾も指摘でき、対機的な和語文献ならではの、マイナス面を持つことも否めない。以上のような事情から、一層、和語文献の信頼性というものが必要なのである。

最近、法然へのアプローチが盛んになり、法然の文獻的な視点からの研究も行われ、和語文献への注目も集まり、さまざまな議論されるようになってきた。⁽¹⁾しかし、現にある史料で、法然のさまざまな議論を行うには、もはや限界があると言わなければならない。より歴史上の事実としての法然の姿、法然浄土教思想の体系を解明するためには、古い史料の発掘や、未発見の法然文献を探し出さなければならないだろう。

今回、報告したいのは、西本願寺に所蔵される、長祿四年写

本『往生要義抄 并十二問答 禅勝房教化 因縁集』についてである。本書は「浄仁」という僧によつて書写された法然の文献である。既に、『古写古版真宗聖教現存目録』で紹介され、存在は認められていたが、研究者の目に触れる機会が少なく、大谷大学に手書きで謄写されたものが残っているが、法然関係の側から調査が及んでいなかった。西本願寺関係各位の深い見識とご理解により、マイクロフィルムのコピーが許可され、佛教大学総合研究所での閲覧が自由となった。法然の文献がまた一つ、限りなく原典に近い状態での研究が可能になったことは、喜ばしいことであり、ひとまず翻刻と若干の問題点を指摘してみた。

書誌は、『古写古版真宗聖教現存目録』に記述される通りであるが、要項をここでも確認しておく。

- 〈時代〉 長祿四年（一四六〇）
- 〈書写〉 麻布善福寺 浄仁
- 〈所蔵者〉 浄土真宗本願寺派本願寺（西本願寺）
- 〈装丁〉 袋綴
- 〈法量〉 縦 二六・三センチ 横 一七・六センチ
- 〈紙数〉 十八帖
- 〈本文〉 一頁七行 一行十九字前後（訓点を除く）

但し、いわゆる「因縁集」の部分（十五帖表から

〈奥書〉

十八帖裏 は、一頁九行から十行、一行二十二字前後となり、字体が極端に小さく変化している。
長祿四年^{庚辰}十二月五日 写之了

阿佐布善福寺常住 浄仁僧 書敬

〈内容〉

- ・往生要義抄（『和語燈録』二の「念仏往生要義抄」に対応）
- ・十二問答（『和語燈録』四の「十二問答」に対応）
- ・禪勝房教化（『和語燈録』四の「禪勝房にしめす御詞」に対応）

・因縁集（法然の法語にはないので、行数字数なども、前のものと趣が異なる。内容も、法然とは無関係であり、察するところ、書写者が、本来別にあつたものを、一緒に書写したか、別のものが何かの理由で合冊され、それを書写者がそのまま書写したか、さまざまに考えられる。『古写古版真宗聖教現存目録』では、付録として扱い、談義本の類であろう、と予測している。）

本書には、法然の文献を収録した『和語燈録』に、対応する法語が存在するわけであるが、『和語燈録』の一部を抜粋した、という形態ではないので、その影響を受けていると断言することは性急である。しかし、「念仏往生要義抄」「十二問答」とい

う名称は、了慧が『和語燈録』で使用したものであり、「念仏往生要義抄」と「禪勝房教化」は、『和語燈録』以前の文献にはないものであるから、『和語燈録』の強い影響下にある可能性は高い。

奥書の「阿佐布善福寺」は、東京都港区元麻布に現存する、浄土真宗本願寺派、麻布山善福寺のことである。ここは、空海（七七四～八三五）が、関東布教の拠点にするため、西の高野山に対して、東の麻布山として、天長元年（八二四）に開創した古刹である。第八世了海の時、常陸にあつた親鸞（一一七三～一二六二）が京都に戻る途中に立ち寄り、真言宗から浄土真宗に改宗したという。それ以降、善福寺の歴代住職は、了海の「海」を受け継いで「○海」と呼ばれているらしい。ために、「浄仁」という住職が善福寺の第何世であるのかは、過去帳では確認できないようである。或は、名刹であり巨大な寺院であるから、何人もの僧侶をかかえていた、その内の一人であるかも知れないが、そうであるなら、浄仁については、さらに確認できにくいことになるう。

いずれにしても、関東随一の浄土真宗本願寺派の善福寺住僧であつた、浄仁の写本が、西本願寺に所蔵されているということとは、それはそれなりに意味のあることであろう。本書自体の価値が高く評価されたから、西本願寺に収められ護持されてい

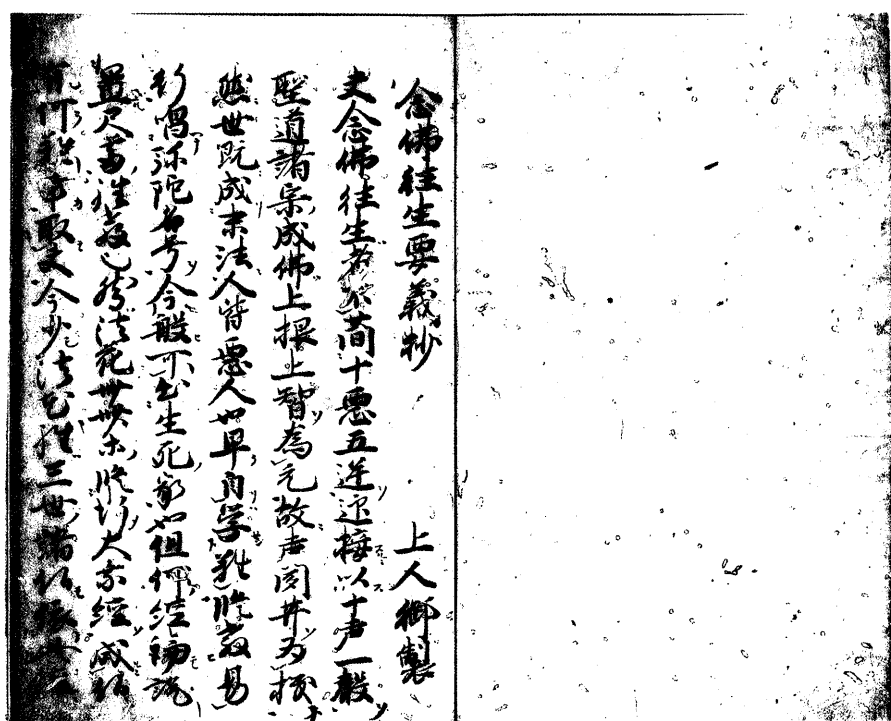
るわけであるし、関東での書写であるから、『和語燈録』や法然文献の伝承経路、それらの広まりなど、本書の存在によって考察されるべき問題は多い。

翻刻に当たっては、法然の文献に関わる事柄が最優先されると思われるので、今回は「因縁集」の部分を省いていることを、あらかじめお断りしておきたい。それぞれ、個々の問題点は、後に述べることにする。

二、翻刻

凡例

1. 漢文体の本文のみを翻刻した。
2. 返り点、送り仮名、ルビ等は、次章にて読み下すので省略した。本文とそれらや抹消符などの位置関係は、写真にて確認されたい。
3. 漢字は、本字、旧字、異体字等、通行の字体に改めた。ただし、本書に特徴的な文字は、そのまま翻刻した。例えば扁叵杓經咲脉等である。
4. 改行改帖ともに原典通りである。帖数は、通例に従って、例えば、一帖表、三帖裏などは、それぞれ、一オ、三ウ、と表記し、改頁を「で示した。



念佛往生要義抄

上人御製

夫念佛往生者不簡十惡五逆迎接以十声一聲
聖道諸宗成佛上根上智為元故声聞菩薩為機
然世既成末法人皆惡人及早自學難修教易
行唱弥陀名号今般可出生死家也但何經論說
置釈尊經教也然法華涅槃等修行大乘經成仏
有何難事有取夫今少法華經三世諸仏依此經

一才

念佛往生要義抄

上人御製

夫念佛往生者不簡十惡五逆迎接以十声一聲
聖道諸宗成仏上根上智為元故声聞菩薩為機
然世既成末法人皆惡人也及早自學難修教易
行唱弥陀名号今般可出生死家也但何經論說
置釈尊經教也然法華涅槃等修行大乘經成仏
有何難事有取夫今少法華經三世諸仏依此經

成、正、覺、然、奉、誦、法、華、經、何、有、何、不、足、加、樣、申、日、美、
可、尔、我、等、器、量、不、及、此、教、也、其、故、法、華、菩、薩、聲、聞、為、機、
故、我、等、凡、夫、不、可、叶、也、然、阿、彌、陀、佛、本、願、為、末、代、我、等、
發、願、利、益、今、時、可、決、定、往、生、也、我、身、無、欲、女、人、我、身、莫、
云、煩、惱、惡、業、身、元、阿、彌、陀、佛、罪、惡、深、重、衆、生、三、世、諸、
佛、十、方、如、來、并、我、等、誓、迎、值、願、往、生、無、疑、深、思、入、申、
南、無、阿、彌、陀、佛、
善、人、惡、人、男、子、女、子、十、人、乍、

十、人、百、人、乍、百、人、皆、遂、往、生、也、
問、云、申、稱、名、念、仏、人、皆、可、往、生、哉、 答、云、他、力、念、
仏、可、往、生、自、力、念、仏、全、不、可、往、生、

問、云、其、他、力、樣、如、何、 答、云、只、一、筋、不、願、我、身、善、惡、
思、決、定、往、生、申、云、他、力、念、仏、譬、如、付、麒麟、尾、蠅、翼、
翔、千、里、值、輪、王、御、幸、卑、夫、一、日、廻、四、天、下、是、申、他、力、
亦、入、大、石、船、時、程、如、扇、向、岸、全、是、非、石、力、船、力、也、夫、

一ウ

成、正、覺、然、奉、誦、法、華、經、何、有、何、不、足、加、樣、申、日、美、
可、尔、我、等、器、量、不、及、此、教、也、其、故、法、華、菩、薩、聲、聞、為、機、
故、我、等、凡、夫、不、可、叶、也、然、阿、彌、陀、佛、本、願、為、末、代、我、等、
發、願、利、益、今、時、可、決、定、往、生、也、我、身、無、欲、女、人、我、身、莫、
云、煩、惱、惡、業、身、元、阿、彌、陀、佛、罪、惡、深、重、衆、生、三、世、諸、
佛、十、方、如、來、棄、我、等、誓、迎、值、願、往、生、無、疑、深、思、入、申、
南、無、阿、彌、陀、佛、
善、人、惡、人、男、子、女、子、十、人、乍、

二オ

十、人、百、人、乍、百、人、皆、遂、往、生、也、
問、云、申、稱、名、念、仏、人、皆、可、往、生、歟、 答、云、他、力、念、
仏、可、往、生、自、力、念、仏、全、不、可、往、生、
問、云、其、他、力、樣、如、何、 答、云、只、一、筋、不、願、我、身、善、惡、
思、決、定、往、生、申、云、他、力、念、仏、譬、如、付、麒麟、尾、蠅、翼、
翔、千、里、值、輪、王、御、幸、卑、夫、一、日、廻、四、天、下、是、申、他、力、
亦、入、大、石、船、時、程、如、扇、向、岸、全、是、非、石、力、船、力、也、夫、

様我亦無力阿弥陀佛以力也即他力也

問云自力者如何 答云煩惱具足以惡力斷煩惱
顯悟成仏得意晝夜策自無始貪瞋具足身故
永斷煩惱難有叵斷無明煩惱三毒具足為斷
譬如須弥碎針大海汲尽芥子杓縱針碎須弥芥
子杓汲尽大海我亦惡業煩惱意經曠劫多生難
成仏其故念々歩々思々事三途八難業寤寐

案云事六趣四生不總云然力爭為修行學道
可為成仏是申自力也

問云申聖人念仏申在家者念仏勝劣如何

答云聖人念仏世間者念仏功德等全不可有替目也

疑云此条尚不審也其故不近女人不為不淨食申念仏
定可勝功德爭可等耶 答云功德等不可有

勝劣其故不知阿弥陀佛本願初卷嘆為疑也

二ウ

様我等無力阿弥陀佛御力也是即他力也

問云自力者如何 答云煩惱具足以惡身斷煩惱

顯悟成仏得意晝夜策自無始貪瞋具足身故

永斷煩惱難有叵斷無明煩惱三毒具足心為斷

譬如須弥碎針大海汲尽芥子杓縱針碎須弥芥

子杓汲尽大海我等惡業煩惱意經曠劫多生難

成仏二成其故念々歩々思々事三途八難業寤寐

案云事六趣四生不總也纂身爭為修行學道

可為成仏是申自力也

問云申聖人念仏申在家者念仏勝劣如何

答云聖人念仏世間者念仏功德等全不可有替目也

疑云此条尚不審也其故不近女人不為不淨食申念仏

定可勝功德爭可等耶 答云功德等不可有

勝劣其故不知阿弥陀佛本願初卷嘆為疑也

改政青至阿弥陀佛二百一十億諸佛淨土莊嚴
樂未惜利金於世自在王仏御前見之如我等妄
想顛倒凡夫无可生事今善導和尚尺一切仏土
皆嚴淨凡夫乱想恐難生此文意一切仏土妙乱想
凡夫無生尺也各々計御身可御覽也其故口説經
身礼拝仏心被思不思事一時無止事然以我等身
争可離生死纂時曠劫以來為三途八難棲炯燃
猛火焦身無出期也悲哉善□年々随成薄惡心日々
順彌增尔有云古人煩惱備身影欲去不去菩提浮
水月為取不取此故阿弥陀仏五劫思惟立申深重
本願不隔善惡不嫌持戒破戒不簡在家出家不論
有智無智冤平等大悲成仏只住他力心申念仏一念
須臾頃可預阿弥陀仏來迎也從生以來不見女人目
酒肉五辛永断五戒十戒等堅持無止事聖人住自

三ウ

然故昔至阿弥陀仏二百一十億諸仏浄土莊嚴
樂等誓願利益於世自在王仏御前見之如我等妄
想顛倒凡夫無可生事也尔善導和尚尺云一切仏土
皆嚴淨凡夫乱想恐難生此文意一切仏土妙乱想
凡夫無生尺也各々計御身可御覽也其故口説經
身礼拝仏心被思不思事一時無止事然以我等身
争可離生死纂時曠劫以來為三途八難棲炯燃

四オ

猛火焦身無出期也悲哉善□年々随成薄惡心日々
順彌增尔有云古人煩惱備身影欲去不去菩提浮
水月為取不取此故阿弥陀仏五劫思惟立申深重
本願不隔善惡不嫌持戒破戒不簡在家出家不論
有智無智冤平等大悲成仏只住他力心申念仏一念
須臾頃可預阿弥陀仏來迎也從生以來不見女人目
酒肉五辛永断五戒十戒等堅持無止事聖人住自

心念申念仏預仏來迎千人一人万人三人何
 候夫善導和尚千中無一被仰候□□如何可有候覺候
 凡阿彌陀仏申本願無様非澄我心非淨不淨身
 只寤寐一脉唱御名人臨終必來住云迎物心
 申一期終預仏來迎不可有疑我身女人又無云在
 家者往生一定可思食也
 問云心澄時念仏妄心中念仏勝劣如何

答云其功德等敢無差別無
 疑云此条尚不審也其故心澄時念仏無余念無一向欲
 極樂世界事被案弥陀本願故無雜者清淨念仏
 心散乱時三業不調口唱名号手廻念珠許是不淨
 念仏也争可等 答云成此疑未知本願故也阿彌陀
 仏為救惡業衆生浮生死大海於弘誓也譬如船入
 重石輕麻柄一船局向岸本願殊勝事何衆生

四ウ

□心於申念仏預仏來迎千人一人万人二人何
 候夫善導和尚千中無一被仰候□□如何可有候覺候
 凡阿彌陀仏申本願無様非澄我心非淨不淨身
 只寤寐一脉唱御名人臨終必來住云迎物心
 申一期終預仏來迎不可有疑我身女人又無云在
 家者往生一定可思食也
 問云心澄時念仏妄心中念仏勝劣如何

五才

答云其功德等敢無差別無
 疑云此条尚不審也其故心澄時念仏無余念無一向欲
 極樂世界事被案弥陀本願故無雜者清淨念仏
 心散乱時三業不調口唱名号手廻念珠許是不淨
 念仏也争可等 答云成此疑未知本願故也阿彌陀
 仏為救惡業衆生浮生死大海於弘誓也譬如船入
 重石輕麻柄一船局向岸本願殊勝事何衆生

只唱名号外無別事

問云一声念仏十聲念仏功德勝劣如何

答云只同事也 疑云此事又不審也其故一声十

聲既有多數多少爭可等 答云此疑申一声十聲

最後時事也死時一声申者往生十聲申者往生云

事也往生等功德何劣本願文設我得佛十方衆生

至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺

此文心法藏比丘我成仏時十方衆生欲生極樂南無阿

彌陀仏若十聲若一声申衆生不迎不成仏誓故不

論數多少往生得否同也本願文顯然也何疑乎

問云最後念仏平生念仏何勝乎 答云只同事也

其故平生念仏臨終念仏何有替目平生念仏死

成臨終念仏云々々々延成平生念仏也

難云最後一念勝百年業見如何 答云此疑不

五ウ

只唱名号外無別事也

問云一声念仏十聲念仏功德勝劣如何

答云只同事也 疑云此事又不審也其故一声十

聲既有數多少爭可等 答云此疑申一声十聲

最後時事也死時一声申者往生十聲申者往生云

事也往生等功德何劣本願文設我得佛十方衆生

至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺

此文心法藏比丘我成仏時十方衆生欲生極樂南無阿

彌陀仏若十聲若一声申衆生不迎不成仏誓故不

論數多少往生得否同也本願文顯然也何疑乎

問云最後念仏平生念仏何勝乎 答云只同事也

其故平生念仏臨終念仏何有替目平生念仏死

成臨終念仏云々々々延成平生念仏也

難云最後一念勝百年業見如何 答云此疑不

六オ

不知此文難止氣時一念惡業強勝善業々々
強勝惡業之事也但此中人無念仏者元云惡
人沙汰事也平生申念仏願往生人事左右更及
沙汰事也

問云蒙攝取益平生歟臨終歟如何 答平生
時也其故往生心誠無疑我身待來迎人是申三
心具足念仏也此具足三心必云生極樂事觀經說也

纂□□阿弥陀仏放八万四千光明照也平生時
照始最後捨也故申不捨誓約也

問云智者念仏愚者念仏何無差別歟 答曰局
仏本願無少差別其故不成阿弥陀仏昔十方衆生
唱我名乃至十声迎立誓簡智者非棄愚者尔五
會法事讃云不簡多聞持淨戒不簡破戒罪根深
但使廻心多念仏能令瓦礫反成金言此文意

六ウ

不知此文難也止氣時一念惡業強勝善業々々
強勝惡業云事也但此中人無念仏者元云惡
人沙汰事也平生申念仏願往生人事左右更及
沙汰事也

問云蒙攝取益平生歟臨終歟如何 答云平生
時也其故往生心誠無疑我身待來迎人是申三
心具足念仏也此具足三心必云生極樂事觀經說也

纂□□阿弥陀仏放八万四千光明照也平生時
照始最後捨也故申不捨誓約也

問云智者念仏愚者念仏何無差別歟 答曰局
仏本願無少差別其故不成阿弥陀仏昔十方衆生
唱我名乃至十声迎立誓簡智者非棄愚者尔五
會法事讃云不簡多聞持淨戒不簡破戒罪根深
但使廻心多念仏能令瓦礫反成金言此文意

七オ

智者愚者持戒破戒只申念仏皆往生云事也住
此心不顧我身善惡憑仏本願可申念仏也今般
離輪廻木經不可有過念仏此見書置物不毀謗
輩必九品蓮結緣互順逆緣不空為一仏淨土緣
抑云機不簡五逆重罪不捨女人闡提云行以
一念十念依之不可恨五障三從憑此願可勵此
行也非念仏力善人尚難生況惡人五念消五障三
念滅三從一念蒙臨終來迎行住坐臥可唱名号
時處諸緣可賴此願穴賢々々
南無阿弥陀佛 南無阿弥陀佛

七ウ

智者愚者持戒破戒只申念仏皆往生云事也住
此心不顧我身善惡憑仏本願可申念仏也今般
離輪廻木經不可有過念仏此見書置物不毀謗
輩必九品蓮結緣互順逆緣不空為一仏淨土緣
抑云機不簡五逆重罪不捨女人闡提云行以
一念十念依之不可恨五障三從憑此願可勵此
行也非念仏力善人尚難生況惡人五念消五障三

八才

念滅三從一念蒙臨終來迎行住坐臥可唱名号
時處諸緣可賴此願穴賢々々
南無阿弥陀佛 南無阿弥陀佛

蓮華集十二問答

隆寛律師問
上人答

問云八宗九宗外立淨土宗自由条余宗人申以
何可申

答云立宗名非仏説自所志付經教悟窮教
義判宗名事也諸宗習皆以如左今立淨土宗
付淨土正依經悟極往生極樂義御座先達立
宗名知宗起物申左様事候也

問云法花真言等不可入雜行人申以東由可
答云惠心先德集一代聖教要文作往生要集
中立十門其第九往生諸業門入法花真言等諸大
乘經諸行雜行言異心同今難者不可惠心先
德増者也

問云付余仏余經修善根人結縁助成候事難行
可申候歟

八ウ

進行集十二問答
隆寛律師問云
上人答

問云八宗九宗外立淨土宗自由条余宗人申候
何可申候

答云立宗名非仏説自所志付經教悟窮教
義判宗名事也諸宗習皆以如左今立淨土宗
付淨土正依經悟極往生極樂義御座先達立
宗名知宗起物申左様事候也

九才

問云法花真言等不可入雜行人申候可答候
答云惠心先德集一代聖教要文作往生要集
中立十門其第九往生諸業門入法花真言等諸大
乘經諸行雜行言異心同今難者不可惠心先
德増者也

問云付余仏余經修善根人結縁助成候事難行
可申候歟

答我心乘弥陀仏本願取決定往生信上他善
根結縁助成事全可成維行我往生可成助業
也他以隨喜讚嘆善根尺可得意也

問云極樂九品差別候事構阿弥陀仏事候

答云極樂九品非弥陀本願無四十八願中是尺尊

巧言也善人惡人云生一處惡業者共可發慢心故有

九品差別善人勸上品惡人下々品說急參可見

問云持戒行者少念仏數返候破戒行人多念仏數返

候往生後位淺深何可進候

答居在押疊言此取有疊有破歟不破歟云

事實無疊何可論末法中無持戒無破戒只

有名字比丘許伝教大師書末法燈明記上行可

為持戒破戒沙汰纂為平凡夫起本願急々称名号

問云念仏行者等於日別所作立音申人候又心念

九ウ

答我心乘弥陀仏本願取決定往生信上他善

根結縁助成事全不可成維行我往生可成助業

也他以隨喜讚嘆善根尺可得意也

問云極樂九品差別候事構阿弥陀仏事候

答云極樂九品非弥陀本願無四十八願中是尺尊

巧言也善人惡人云生一處惡業者共可發慢心故有

九品差別善人勸上品惡人下々品說急參可見

問云持戒行者少念仏數返候破戒行人多念仏數返

候往生後位淺深何可進候

答居在押疊言此取有疊有破歟不破歟云

事實無疊何可論末法中無持戒無破戒只

有名字比丘許伝教大師書末法燈明記上行可

為持戒破戒沙汰纂為平凡夫起本願急々称名号

問云念仏行者等於日別所作立音申人候又心念

十才

取数人候何能可候

答夫口唱名号心念名号何可成往生業但仏本願
稱名願故立音可唱是故經說令声不絶具足十
念积言称我名号下至十声聞耳程取高声念仏也
尔不知譏嫌非可高声地体可思出声也

問曰日別念仏數遍入相続程何可計候歟

答依善導御积一万已上可相続候但一万返急

申尔不可有夕其日事一万返可為一日一夜所作也

惣一食間三度計思出能相続可有夫衆生根性

不同不可一準志深自然被為相続也

問云礼讃深心中积一声十声必得往生乃至一念無

有疑心又疏深心中积念々不捨者是名正定之業何

我分可思定候

答十声一声积信念仏様念々不捨者积行念仏様也

十ウ

取数人候何能可候

答夫口唱名号心念名号何可成往生業但仏本願

稱名願故立音可唱是故經說令声不絶具足十

念积言称我名号下至十声聞耳程取高声念仏也

尔不知譏嫌非可高声地体可思出声也

問曰日別念仏數遍入相続程何可計候歟

答依善導御积一万已上可相続候但一万返急

申尔不可有夕其日事一万返可為一日一夜所作也

惣一食間三度計思出能相続可有夫衆生根性

不同不可一準志深自然被為相続也

問云礼讃深心中积一声十声必得往生乃至一念無

有疑心又疏深心中积念々不捨者是名正定之業何

我分可思定候

答十声一声积信念仏様念々不捨者积行念仏様也

故信取生一念行可策一形勸积也又大意一発
心已後誓畢此生無有退転以浄土為期积可為本也
問云本願一念尋常機臨終機共可通候歟
答一念願命促為不及二念機也可通尋常機可
上尽一形积以此积得意必不可云一念本願积念々
不捨者是名正定業順彼仏願故此积積數返聞
本願只過本願機遲速不同發上尽一形下至一念
本願可得意也故念仏往生願善導积

問云自力他力事何可得意以
答源空無可參殿上器量上召二度參此我無可
參種上御力也況阿弥陀仏力答称名願來迎事何
可有不可審我身罪重無智仏何救何思物費
不知仏願物也纂罪人共安々助救料起本願名号
乍唱塵計不有疑心也十方衆生言中有智無智

十一ウ

故信取生一念行可策一形勸积也又大意一発
心已後誓畢此生無有退転以浄土為期积可為本也
問云本願一念尋常機臨終機共可通候歟
答一念願命促為不及二念機也可通尋常機不可
上尽一形积以此积得意必不可云一念本願积念々
不捨者是名正定業順彼仏願故此积積數返聞
本願只過本願機遲速不同發上尽一形下至一念
本願可得意也故念仏往生願善導积

十二オ

問云自力他力事何可得意候
答源空無可參殿上器量上召二度參此我無可
參種上御力也況阿弥陀仏力答称名願來迎事何
可有不可審我身罪重無智仏何救何思物費
不知仏願物也纂罪人共安々助救料起本願名号
乍唱塵計不有疑心也十方衆生言中有智無智

有罪無罪善人惡人持戒破戒男子女人三寶滅盡後百才衆生皆籠也三寶滅盡時念仏者當時御坊達竝當時御坊達如仏彼時人命只十才也戒定惠三學只不聞名惣無云許物共可預來迎乍知道理我身可被棄參樣何可案出只無極樂願不申念仏事可有往生障故云他力本願云超世悲願也

十二ウ

有罪無罪善人惡人持戒破戒男子女人三寶滅盡後百才衆生皆籠也三寶滅盡時念仏者當時御坊達竝當時御坊達如仏彼時人命只十才也戒定惠三學只不聞名惣無云許物共可預來迎乍知道理我身可被棄參樣何可案出只無極樂願不申念仏事可有往生障故云他力本願云超世悲願也」

問云可具至誠等三心候樣如何可思定候答具三心事只無別樣阿弥陀仏本願我稱念名号必來迎被仰決定參被引接深信心念口稱不疎既往生心地至最後一念不斷者自然具足三心也又在家物共是程不思只申念仏物生極樂常申念仏暗具足三心也尔無云甲斐物共中神妙往生有為事也

十三才

問云可具至誠等三心候樣如何可思定候答具三心事只無別樣阿弥陀仏本願我稱念名号必來迎被仰決定參被引接深信心念口稱不疎既往生心地至最後一念不斷者自然具足三心也又在家物共是程不思只申念仏物生極樂常申念仏暗具足三心也尔無云甲斐物共中神妙往生有為事也」

問曰臨終一念勝百年業申平生念仏中臨終
一念程念仏不申出候

答三心具足念仏同事也其故觀經云具三心者
必生彼國有必文字故臨終一念同事也

十二問答畢

上人對禪勝房往生道被授其御詞云

阿弥陀仏一念唱擬一度往生發本願也故十念

十度生功德也從成一向專修念仏者日至臨終時

申取集一期念仏一度往生必為事也

又云申念仏機生付任申也依先世事受今生身

事此世得直改事也譬如女人欲成男子今生

内不成男子智者々々申愚者々々申慈悲者有

慈悲申邪見者乍邪見申一切人皆如斯尔阿

弥陀仏十方衆生廣發願在

十三ウ

問曰臨終一念勝百年業申平生念仏中臨終
一念程念仏不申出候候

答三心具足念仏同事也其故觀經云具三心者
必生彼國有必文字故臨終一念同事也

十二問答畢

上人對禪勝房往生道被授其御詞云

阿弥陀仏一念唱擬一度往生發本願也故十念

十度生功德也從成一向專修念仏者日至臨終時

申取集一期念仏一度往生必為事也

又云申念仏機生付任申也依先世事受今生身

事此世得直改事也譬如女人欲成男子今生

内不成男子智者々々申愚者々々申慈悲者有

慈悲申邪見者乍邪見申一切人皆如斯尔阿

弥陀仏十方衆生廣發願在

十四オ

念一念十念云往生申念仏疎相信力妨行也
 念不捨欲一念十念不定行妨信也故信取
 生一念行一形可策
 又云一念欲不定者念々每念仏成不信念仏也
 其故阿弥陀仏一念宛置一度往生願每念々
 成往生業也

十四ウ

亦云一念十念云往生申念仏疎相信力妨行也
 □念々不捨欲一念十念不定行妨信也故信取
 生一念行一形可策
 又云一念欲不定者念々每念仏成不信念仏也
 其故阿弥陀仏一念宛置一度往生願每念々
 成往生業也 已上四ヶ条

三、読み下し

凡例

1. この読み下しは、訓点が付された西本願寺蔵長祿四年写本『往生要義抄 并十二問答 禪勝房敎化 因縁集』を読み下したものである。
2. 付された送り仮名のまま表記して、読みにくい場合、（ ）によって補った。
3. ルビが付されている場合は、当該漢字の後にへんで示し、原典通りに表記した。
4. 漢字は、本字、旧字、異体字等、通行の字体に改めた。ただし、本書に特徴的な文字は、そのまま翻刻した。例えば扁叵杪經咲脉等である。
5. 句読点を付した。
6. 帖数は、通例に従って、例えば、一帖表、三帖裏などは、それぞれ、一オ、三ウ、と表記するが、読み下しの性格上、原典通りの改行が不可能なため、文字を追いつ込んである。改頁を「」で示すにとどめた。

一オ

念仏往生要義抄

上人御製

夫念仏往生ハ十惡五逆ヲ簡(ハ)ス、迎接スル二十声一聲ヲ以ス。聖道諸宗ノ成仏ハ上根上智ヲ元(ト)為(ス)故ニ、声聞菩薩ヲ機トス。然ニ、世既ニ末法ニ成リ人皆惡人也。早ク修(シ)難(キ)敎(ヲ)学セシヨリハ、行(シ)易(キ)弥陀名号ヲ唱ヘテ、今般ヒ生死ノ家(ヲ)出(ス)ヘキ也。但何レノ經論モ釈尊ノ説キ置(キ)タテマツル經敎也。然ハ法華涅槃等ノ大乘經ヲ修行シテ仏(ト)成ルニ何ニ難キ事カ有(ラ)ン。夫(ニ)取(リテ)モ今少シ法華經ハ三世ノ諸仏モ此經ニ依テ「正覺ヲ成リタマフ。然ニ法華經何ントヲ讀(シ)奉(ラ)ン□、何ソノ不足カ有(ラ)ム。加樣ニ申(ス)日ハ実ニ尔ルヘキナレトモ、我等カ器量ハ此敎ニ及(ハ)サル也。其故ハ法華ニハ菩薩声聞ヲ機ト為(ス)故ニ、我等凡夫ハ叶(フ)ヘカラサル也。然ニ阿弥陀仏ノ本願ハ、末代ノ我等カ為ニ発(シ)タマヘル願ナレハ、利益今ノ時ニ決定往生(ス)ヘキ也。我身ハ女人ナレハト欲(フ)コト無ク、我身ハ煩惱惡業ノ身ナレハト云(フ)コト莫レ。元ヨリ阿弥陀仏ハ、罪惡深重ノ衆生ノ三世ノ諸仏モ十方如来モ棄(テ)サセタマヒタル我等ヲ迎ヘント誓(ヒ)タマヒケル願ニ値ヘリ。往生疑無(シ)ト深ク思ヒ入テ、南無

一ウ

二オ

阿弥陀仏々々々々々々ト申セハ、善人モ悪人モ男子モ女子モ、十人ハ」十人乍ラ百人ハ百人乍(ラ)、皆往生(ラ)遂クル也。

問(フテ)云(ハク)、称名念仏申(ス)人ハ、皆往生(ス)ヘキカ。答(ヘテ)云(ハク)、他力ノ念仏ハ往生(ス)ヘシ。自力ノ念仏ハ全ク往生スヘカラス。

三オ

問云、其(ノ)他力(ノ)様如何。答云、只一筋ニ我身ノ善悪(ヲ)顧ミス、決定往生ト思(ヒ)テ申スヲ他力念仏ト云(フ)。譬(ヘ)ハ、麒麟ノ尾ニ付(キ)タル蠅モ、一

二ウ

翼ニ千里(ヲ)翔リ、輪王ノ御幸ニ値(ヒ)タル卑夫フノ、一日ニ四天下ヲ廻ルカ如シ。是ヲ他力ト申(ス)ナリ。亦大ナル石ヲ船ニ入レツレハ、時ノ程ニ向ヘノ岸ニ届ヘトツクカ如(シ)。全ク是ハ石ノ力ニ非(ス)、船ノ力也。夫レカ」様ニ、我等カ力ニテハ無シ。阿弥陀仏ノ御力也。是即(チ)他力也。

三ウ

問云、自力トハ如何。答云、煩惱具足シテ悪口キ身ヲ以(テ)煩惱ヲ断(シ)、悟ヲ顕ハシテ成仏スト意得テ昼夜ニ策メトモ、無始ヨリ貪瞋具足ノ身ナルカ故ニ、永ク煩惱ヲ断(ス)ルコト難キナリ。右ク断シ匡キ無明煩惱ヲ、三毒具足ノ心ニテ断セ□トスルコト、譬ヘハ須弥ヲ針ニテ碎ヒテ、大海ヲ芥子ノ杓ニテ汲ミ尽サン

カ如シ。縦ヒ針ニテ須弥ヲ碎キ芥子ノ杓ニテ大海ヲ汲(ミ)尽ストモ、我等カ悪業煩惱ノ意ニテハ、曠劫多生ヲ経(ル)トモ、仏ニ成(ラ)ンコト難シ。其故ハ念々歩々ニ思(ヒ)ト思フ事ハ、三途八難ノ業、寤(テ)モ寐テモ」案スト案(ス)ル事ハ、六趣四生ノ木經也。纂ル身ニテハ争カ修行学道ヲ為シテ成仏ハスヘキヤ。是ヲ自力ト申(ス)也。

問云、聖人ノ申サセタマフ念仏ト、在家ノ者ノ、申ス念仏ト、勝劣如何ン。

答云、聖人ノ念仏ト世間ノ者ノ、念仏ト、功德等(シク)シテ全ク替リ目有(ル)ヘカラサル也。疑(ヒテ)云ク、此(ノ)条尚不審也。其(ノ)故ハ、女人ニモ近(ツ)カス、不淨ノ食モセス申サン念仏ハ、定(メ)テ勝(ヘ)スクレヘシ。功德争(カ)等(シカル)ヘキヤ。答云、功德等クシテ、勝劣有ルヘカラス。其(ノ)故ハ、阿弥陀仏ノ本願ヲ知ラサル物ノ、纂ル咲ヘヲカシキ」疑ヲハスル也」然ル故ハ、昔阿弥陀仏、二百一十億ノ諸仏ノ淨土ノ庄嚴宝衆等ノ誓願利益ニ至テ、世自在王仏ノ御前ニ於(テ)之(ヲ)見タマフニ、我等如キノ妄想顛倒ノ凡夫ノ、生(マル)ヘキ事ノ無(キ)也。尔レハ善導和尚尺シテ、一切仏土皆嚴淨凡夫乱想恐難生ト云ヘリ。此文ノ

四オ

意ハ、一切ノ仏土ハ妙ナレトモ、乱想ノ凡夫ハ生(マ)ル、コト無(シ)ト尺シタマフ也。各々ノ御身ヲ計ヒテ御覽(ス)ヘキ也。其故ハ、口ニハ経ヲ読ミ、身□仏ヲ礼拝スレトモ、心ニハ思(ハ)サル事ノミ思ハレテ、一時モ止ムル事無(シ)。然レハ、我等(カ)身ヲ以(テ)、争(カ)生死(ヲ)離(ル)ヘキ。纂ル時キニ、曠劫ヨリ以來三途八難ヲ棲ト為(シ)、炯燃^ニ猛火ニ身ヲ焦シシテ、出ル期無(カ)リケル也。悲(シキ)哉、善□ハ年々ニ随テ薄ク成リ、惡心ハ日々ニ順(ヒ)テ弥ヨ増(ス)。尔レハ古人ノ云(ヘ)ルコト有リ。煩惱ハ身ニ備ハル影ケ去(ラント)欲(ス)レトモ去(ラ)ス、菩提ハ水ニ浮ヘル月取(ラ)ントストモ取(ラ)ス。此故ニ、阿弥陀仏五劫ニ思惟シテ立テタマフヘシ深重ノ本願ト申スハ、善惡ヲ隔(テ)ス、持戒破戒ヲ嫌(ハ)ス、在家出家ヲモ簡(ハ)ス、有智無智ヲ論(セ)ス、平等ノ大悲ヲ発シテ仏ニ成(リ)タマヒタレハ、只他力ノ心ニ住シテ念仏ヲ申(セ)ハ、一念須臾ノ頃ニ阿弥陀仏ノ来迎(ニ)預(カル)ヘキ也。生(マレ)テ從(リ)以來タ女人ヲ目(ニ)見ス、酒肉五辛永ク斷シテ、五戒十戒等堅ク持(チ)テ止事無キ聖人モ、自^レ□ノ心ニ住シテ念仏申(サ)ンニ於(キテ)、仏ノ来迎ニ預(カラ)ンコト、千人カ一人、万人カ一二

五オ

人何ントヤ候ハスラン。夫(レ)モ善導和尚ハ千中無一ト仰セラレ候ヘハ、如何カ有(ル)ヘク候ラント覺ヘ候。凡ソ阿弥陀仏ノ本願ト申(ス)コトハ様モ無ク、我心澄セトニモ非(ス)、不淨ノ身ヲ淨メヨトニモ非(ス)、只寤モ寐モ一脉ニ御名ヲ唱(フ)ル人ヲハ、臨終ニハ必(ス)来(リ)テ迎(ヘ)タマフナル物ヲト云フ心ロニ住シテ申セハ、一期ノ終(リ)ニハ仏ノ来迎ニ預(ラ)ンコト、疑(ヒ)有(ル)ヘカラス。我身ハ女人ナレハ、又在家ノ者ナレハト云(フ)コト無ク、往生ハ一定ト思食スヘキ也問云、心ノ澄マン時ノ念仏ト、妄心ノ中ノ念仏ト、勝劣如何。」

答云、其(ノ)功德等クシテ、敢テ差別無(シ)。疑云、此(ノ)条尚不審也。其故ハ、心ノ澄(ム)時ノ念仏、余念無(ク)一向極樂世界ノ事ノミ欲ハレ、弥陀ノ本願ノミ案セラル、故ニ、雜フル者ノ無(ケ)レハ清淨ノ念仏ナリ。心散乱スル時ハ三業不調ニシテ、口ニハ名号ヲ唱ヘ手ニハ念珠ヲ廻ハス許ニテハ、是レ不淨ノ念仏也。争(カ)等カルヘキ。答云、此ノ疑ヲ成スハ、未タ本願ノ故ヲ知ラサル也。阿弥陀仏、惡業ノ衆生ヲ救ハン為(ニ)生死ノ大海ニ弘誓ノ船ヲ浮(ヘ)タマヘル也。譬ハ船ニ、重キ石、輕キ麻柄ヲ一船ニ入(レ)、向

四ウ

五ウ

ヒノ岸ニ肩カ如(シ)。本願ノ殊勝ナル事ハ何ナル衆生モ」只名号ヲ唱フル外ハ別ノ事無キ也。

問云、一声ノ念仏ト十声ノ念仏ト、功德ノ勝劣如何。

答云、只同シ事也。疑云、此(ノ)事又不審也。其故

ハ、一声十声既ニ数ノ多少有リ。争力等(シ)カルヘキヤ。答云、此(ノ)疑ハ、一声十声ト申(ス)コトハ最

後ノ時ノ事也。死スル時一声申ス者ノモ往生ス。十声申(ス)者ノモ往生スト云フ事也。往生タニモ等クハ、

六オ

功德何ソ劣トラン。本願ノ文ニ、設我得仏十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺」此文ノ心ハ、法藏比丘、我、仏ニ成(リ)タラン時、十方ノ衆生、極樂ニ生レント欲フ(「テ」の誤写か)、南無阿彌陀仏ト、若ハ十声若ハ一声申サン衆生ヲ迎ヘスンハ仏ニ成ラシト誓(ヒ)タマフ故ヘニ、数ノ多少ヲ論セス、往生ノ得否ハ同(シ)キ也。本願ノ文顯然也。何(ソ)疑ハン乎。

問云、最後ノ念仏ト平生ノ念仏ト、何レカ勝タル乎。答云、只同(シ)事也。其故ハ、平生ノ念仏、臨終ノ念仏トテ、何シ(ノ)替目カ有(ラン)。平生ノ念仏ノ、死スレハ臨終ノ念仏ト成リ、々々ノ々々ノ、延フレハ平生ノ念仏ト成(ル)也。

六ウ

難シテ云、最後ノ一念ハ百年ノ業ニ勝レタリト見ヘタリ。如何。答云、此ノ疑ハ」此ノ文ヲ知ラサル(「不」

の重複)難也。氣ノ止ムル時ノ一念ハ、惡業強クシテ

善業(ニ)勝レタリ。々々強クシテ惡業ニ勝(レ)タリト云(フ)事也。但シ、此ノ申ス人ハ念仏者ニテハ無シ。

元ヨリ惡人ノ沙汰ヲ云(フ)事也。平生ヨリ念仏申シテ往生ヲ願フ人ノ事ヲハ、左モ右クモ、更ニ沙汰ニ及ハヌ事也。

問云、撰取ノ益ヲ蒙ルコトハ平生カ臨終カ、如何。答

云、平生ノ時也。其故ハ、往生ノ心誠ニテ、我身ヲ疑(フ)コト無クテ来迎ヲ待ツ人ハ、是レ三心具足ノ念仏

七オ

ト申ス也。此ノ三心ヲ具足シヌレハ必ス極樂ニ生(ル)ト云(フ)事ハ、觀經ノ説也」纂(ヘカ)ル□□阿彌陀仏ハ八万四千ノ光明ヲ放(チ)テ照(シ)タマフ也。平生ノ時照シ始テ最後マテ捨タマハヌ也。故ニ不捨ノ誓約ト申ス也

問云、智者ノ念仏ト愚者ノ念仏ト、何レモ差別無シヤ。答曰、仏ノ本願ニ肩(ヘトツ)カハ少(シ)ノ差別モ無(シ)。其故ハ、阿彌陀仏ニ成リタマハサリシ昔シ、十方衆生我名ヲ唱ヘハ、乃至十声マテモ迎ヘント誓(ヒ)ヲ立テタマヒケルハ、智者(ヲ)簡(ヘ)ランヒ愚者ヲ棄

七ウ

(ル)トニハ非ス。尔レハ、五会法事讃ニ云ク、不簡多聞持淨戒不簡破戒罪根深但使廻心多念仏能令瓦礫反成金、ト言ヘリ。此ノ文ノ意ロハ、「智者モ愚者モ持戒モ破戒モ、只念仏ヲ申セハ皆往生スト云(フ)事也。此心ニ住シテ我身ノ善惡ヲ顧ミス、仏ノ本願ヲ憑(ミ)念仏申(ス)ヘキ也。今般ヘコノタヒ輪廻ノ木經ヲ離ル、コト、念仏ニ過(キ)タルコトハ有ルヘカラス。此ノ書キ置(キ)タル物ヲ見テ、毀(ソシ)リ謗セン「不」挿入符」輩ハ、必ス九品ノ蓮ニ縁ヲ結ヒ、互ニ順逆ノ縁空(シ)カラス、一仏淨土縁(ト)為シ、抑、機ヲ云ヘハ五逆重罪ヲ簡(ハ)ス、女人闍提ヲモ捨テス、行(ヲ)云ヘハ一念十念ヲ以テス。之(ニ)依(テ)五障三從ヲ恨(ム)ヘカラス。此(ノ)願ヲ憑ミ、此ノ行ヲ勵ヘハケンマスヘキ也。念仏ノ力ニ非(ラス)ハ、善人尚生(マレ)難(シ)。況ヤ惡人ヲヤ。五念ニ五障ヲ消シ、三「念ニ三從ヲ滅シテ、一念ニ臨終ノ来迎ヲ蒙ラント、行住坐臥ニ名号ヲ唱(フ)ヘシ。時処諸縁ニ此願ヲ頼ノムヘシ。穴賢々々

南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏

八ウ

進行集十二問答隆寛律師問ト云上人ノ答問云、八宗九宗ノ外ニ淨土宗ヲ立ル事、自由ノ条カナト、余宗ノ人ノ申候ヲハ、何カンカ申候ヘキ。答云、宗ノ名ヲ立ル事、仏ノ説ニ非ス。自(ヘ)ヲ(スカ)ラ志(ス)所ノ經敎ニ付(キテ)敎フル義ヲ悟リ窮テ、宗ノ名ヲ判スル事也。諸宗ノ習、皆以テ左ノ如(シ)。今、淨土宗ヲ立ルコトハ、淨土ノ正依經ニ付テ往生極樂ノ義ヲ悟リ極メテ御座マス先達ノ、宗ノ名ヲハ立タマヘル。宗(ノ)起リヲ知(ラ)□物ノ、左様ノ事ヲハ申候也。」

九オ

問云、法花真言等ヲハ、雜行ニハ入(ル)ヘカラス、(ト)人々申候ヲハ、如何答ヘ候ヘキ。答云、恵心先德、一代聖敎ノ要文ヲ集メテ往生要集ヲ作(リ)タマヘル中ニ、十門ヲ立ツ。其ノ第九ノ往生諸業門ニ、法花真言等ノ諸大乘經ヲ入(レ)タマヘリ。諸行ト雜行ト、言ハ異ニシテ心同シ。今ノ難者ハ、恵心ノ先德ニ増サルヘカサル者也。

問云、余仏余經ニ付(キテ)善根ヲ修セン人ニ結縁助成シ候(ヒ)シハ事ハ、雜行ト申シ候ヘキ歟」

答。我カ心、弥陀仏ノ本願ニ乗シ決定往生ノ信ヲ取(ル)上ニハ、他ノ善根ニ結縁助成セン事ハ全(ク)雜行

八オ

「

九ウ

二成(ル)ヘカラス。我カ往生ノ助業ト成(ル)ヘキ也。他ノ善根ヲ隨喜讚嘆セヨト尺シタマヘルヲ以テ得意ヘキ也。

問云、極樂九品ノ差別ノ候事ハ、阿弥陀仏ノ構ヘサセタマヘル事ニテ候ヤラン。

答云、極樂ノ九品ハ弥陀ノ本願ニ非(ラス)、四十八願ノ中カニモ無シ。是レハ尺尊ノ巧言也。善人惡人一処ニ生ルト云ハ、惡業ノ者ノ共、慢心ヲ發(ス)ヘキ(カ)故ニ、九品ノ差別ヲ有セテ善人ハ上品ニ勸(ミ)、惡人ハ下品ニ下ルト説(キ)タマヘルナリ。急(キ)参(リ)テ見ルヘシ」

十才

問云、持戒ノ行者ノ念仏ノ數返ノ少ク候ハント、破戒ノ行人ノ念仏數返ノ多ク候ハント、往生ノ後、位ノ淺深何レカ進ミ候ヘキ

答。居テ在ス疊ヲ押ヘテ言タマハク、此ノ疊ノ有ルニ取テコソ、破(レ)タル歟破(レ)サル歟ト云事ハ有レ。費(ツヤ)ノ無(カ)ラン疊ヲハ何ニトカ論スヘキ。末法ノ中ニハ持戒無ク破戒モ無シ。只(ヘタ)ノ名字ノ比丘許(リ)有リト、伝教大師ノ末法灯明記ニ書キタマヘル上ニハ、何ニト持戒破戒ノ沙汰ヲハ為(ス)ヘキソ。纂ル平凡夫ノ為メニ起(シ)タマヘル本願ナレハトテ、

十ウ

急々名号ヲ称スヘキナリ。

問云、念仏ノ行者等、日別ノ所作ニ於(テ)音ヲ立テ、申(ス)人モ候。又心ニ念シテ「數ヲ取(ル)人モ候。何レカ能(ク)候ヘキ。

答。夫レハ口ニテ唱フルモ名号、心ニテ念スルモ名号ナレハ、何レモ往生ノ業トハ成(ル)ヘシ。但、仏ノ本願ハ称名ノ願ナルカ故ニ、音ヲ立テ、唱(フ)ヘキ也。是故ニ、經ニハ令声不絶具足十念ト説キ、尺ニハ称我名号下至十声ト言タマヘリ。耳ニ聞ユル程ハ高声念仏ニ取ル也。尔ハトテ譏嫌ヲ知ラス高声ナルヘキニハ非(ラス)。地体ハ声ヲ出(スト)思(フ)ヘキ也。

問曰、日別ノ念仏ノ數遍、相續ニ入ル程ハ何カンカ計ヒ候ヘキ歟。

答。善導ノ御尺ニ依ルニ、一万已上ハ相續ニテ候ヘシ。但、一万返ヲモ急キ」申テ、尔テ其日ヲタヘクラサンノ事ト有(ル)ヘカラス。一万返ナリトモ一日一夜ノ所作ト為(ス)ヘキ也。惣シテハ、一食ノ間ニ三度計リ思出ンハ、能キ相續ニテ有ルヘシ。夫レハ衆生ノ根性不同ナレハ一準ナルヘカラス。志タニ深ケレハ、自然ニ相續ハセラル、也。

問云、礼讀ノ深心ノ中ニハ、一声十声必得往生乃至一

念無有疑心、ト尺シタマヘリ。又疏ノ深心ノ中ニハ、念々不捨者は名正定之業、ト尺シタマヘリ。何レカ我カ分ニハ思定候ヘキ

十一ウ

答。十声一声ノ尺ハ、念仏ヲ信スル様、念々不捨者ノ尺ハ、念仏ヲ行スル様也。」故ニ、信ヲハ一念ニ生ルト取(リ)、行ヲハ一形ニ策ムヘシト勸(メ)タマヘル尺也。又大意ハ、一発心已後誓畢テ此ノ生退転有コト無(シ)、浄土ヲ以(テ)期ト為ル尺ヲ、本ト為スヘキ也。

問云、本願ノ一念ハ、尋常ノ機ニモ臨終ノ機ニモ共ニ通シ候ヘキ歟。

十二オ

答。一念ノ願ハ、命促ヘツ、マリシテ一念ニ及ハサル機ノ為也。尋常ノ機ニ通(ツ)ヘクハ上尽一形ノ尺アルヘカラス。此尺(ヲ)以テ意得ルニ、必(ス)シモ一念ヲ本願ト云(フ)ヘカラス。念々不捨者は名正定シ業順彼仏願故ト尺シタマヘリ。此ノ尺ハ、数返ヲ積シモ本願ト聞ヘタルハ、只本願ニ遇(フ)機ノ遅速不同ナレハ、上尽一形下至一念ト発(シ)タマヘル」本願ナリト意得ヘキ也。故ニ念仏往生ノ願トコソ善導ハ尺シタマヘリ。

問云、自力他力ノ事ハ何シカ意得候ヘキ。

答。源空ハ殿上ヘ参(ル)ヘキ器量ニテハ無(ケ)レトモ、上ヨリ召セハ二度マテ参(リ)タリキ。此ハ、我参(ル)

十二ウ

ヘキ種ナニテハ無(ケ)レトモ、上ノ御力也。況シテ、阿弥陀仏ノ力ニテ称名ノ願ニ答ヘテ来迎セサセタマハシ事ハ、何シノ不審カ有(ル)ヘキ。我身、罪重クテ無智ナレハ、仏モ何カニシテカ救ヒタマハン何ント、思ハン物ハ、費ヤ／＼仏ノ願ヲモ知ラサル物也。纂ル罪人共ヲ安々ト助(ケ)救ハン料ニ起シタマヘル本願ノ名号ヲ唱(ヘ)乍(ラ)、塵計モ疑心有ルマシキ也。十方衆生ノ言ハノ中ニ、有智モ無智モ」有罪無罪善人惡人持戒破戒男子女人三宝滅尽ノ後ノ百才マテノ衆生、皆籠ル也。彼ノ三宝滅尽ノ時ノ念仏者ト當時ノ御坊達ト並フレハ、當時ノ御坊達ハ仏ノ如シ。彼時ノ人ノ命ハ只十才也。戒定恵ノ三学、只名ヲタニモ聞カス、惣シテ云(フ)許(リ)無(キ)物共ノ、来迎ニ預(ル)ヘキ道理ヲ知(リ)乍(ラ)、我身ノ棄ラレ参(ラ)スヘキ様ヲハ、何ニシテカ案シ出スヘキ。只極楽ノ願ハシクモ無ク、念仏ノ申サレサル事ヲノミコソ、往生ノ障リニテハ有ヘケレ。故(ニ)他力本願トモ云(ヒ)超世ノ悲願トモ云(フ)也。」

十三オ

問云、至誠等ノ三心ヲ具(シ)候ヘキ様ヲハ如何シカ思定メ候ヘキ。

答。三心ヲ具スル事ハ、只別ノ様無(シ)。阿弥陀仏ノ

本願ニ、我カ名号ヲ称念セハ必(ス)来迎セント仰セラレタレハ、決定シテ引接セラレ参(ラ)センスルソト、深ク信シテ心ニ念シ、口ニ称□□疎カラス、既ニ往生シタル心地シテ、最後一念ニ至ルマテ断ヘタユマンサル者ノハ、自然ニ三心ハ具足スル也。又在家ノ物共ハ是程マテ思ハサレトモ、只念仏ヲ申ス物ノハ極樂ニ生ルナレハトテ、常ニ念仏ヲ申セハ暗ニ三心ヲハ具足スル也。尔ハトモ、云フ甲斐無(キ)物共ノ中ニモ、神妙ナル往生ヲハ為ル事ニテ有(レ)ト也」

十三ウ

問曰、臨終ノ一念ハ百年ノ業ニ勝(レ)タリト申スハ、平生ノ念仏ノ中カニ臨終ノ一念程ノ念仏ヲハ申し出シ候マシク候ヤラン。

答。三心具足ノ念仏ハ同事也。其故ハ、觀經ニ、具三心者必生彼国ト云ヘリ。必ノ文字ノ有ル故ニ、臨終ノ一念ト同シ事也。

十二問答畢

上人禪勝房(ニ)對(シ)往生ノ道(ヲ)授(ケ)ラル(ル)其(ノ)御詞(ニ)云(ク)

阿弥陀仏ハ、一念唱(フ)ルニ一度ノ往生ヲ擬(ヘ)アテカニヒテ、発(シ)タマヘル本願也。故二十念ハ「十度ヒ生ル、功德也。一向專修ノ念仏者ニ成ル日從リ、臨終ノ

時ニ至(ル)マテ申(シ)タル一期ノ念仏ヲ取集メテ、一度ノ往生ハ必ススル事也。

又云、念仏申(ス)機ハ、生(マレ)付キノ任ニテ申(ス)也。先世ノ事ヘシワサンニ依テ今生ノ身ヲモ受(ケ)タル事ナレハ、此ノ世ニテハ得直ラシ改メヌ事也。譬ハ、女人ノ男子ト成ラント欲ヘトモ、今生ノ内ニハ男子ト成(ラ)サルカ如シ。智者ハ々々ニテ申(シ)、愚者ハ々々(ニテ)申シ、慈悲者ハ慈悲有テ申シ、邪見者ハ邪見乍(ラ)申ス。一切ノ人皆斯(ノ)如(シ)。尔(レ)ハコソ阿弥陀仏ハ、十方衆生トテ広ク願ヲハ發シテ在マセ。」

十四ウ

亦云、一念十念ニテ往生スト云(ヘ)ハトテ、念仏ヲ疎相□申セハ、信力カ行ヲ妨クル也。念々不捨ト□ハトテ、一念十念ヲ不定ニ欲ヘハ、行カ信ヲ妨ル也。故ニ、信ヲハ一念ニ生□ト取り、行ヲハ一形ニ策(ヘ)ハケムヘシ。

又云、一念ヲ不定ニ欲フ者ノハ、念々ノ念仏毎ニ不信ノ念仏ニ成(ル)也。其故ハ、阿弥陀仏ハ一念ニ一度ノ往生ヲ宛テ置(キ)タマヘル願ナレハ、念々毎ニ往生ノ業ト成ル也。已上四ヶ条

四、問題点

本書は漢文体で、送り仮名や、時に振り仮名がふつてある。だが、もとのテキストは和語である。ならば本書は『和語燈録』系のものである、わざわざ漢文に直して書写されたものなのだろうか。

そもそも『和語燈録』の写本刊本の流伝系統に関して、考えられることはいくつかある。①『和語燈録』のオリジナルが、もともと漢文の色彩の濃いもので、その送り仮名が本文に入り込んで、カタカナ系和語、そこから元亨版『和語燈録』と、寛永版『和語燈録』の、二系統が出てくる。②元亨版『和語燈録』がオリジナルを模したと想定され、つまりオリジナルに近い元亨版をもとに、寛永版『和語燈録』や他の写本刊本へと派生する。③了慧の原本がどういう形態であったかはともかくとして、原本に近い段階で既に漢文系、カタカナ系、ひらがな系、それぞれの『和語燈録』が存在した。

従来、②のような形のみ認められ、元亨版が非常に重要視されていたが、鎌倉時代書写と考えられる『和語燈録』の断簡が京都西往寺に所蔵され（以下、西往寺本）、それをもとに中野正明は、さまざまな可能性を指摘している。また、寛永版は、元亨版、正徳版とともに比較すると元亨版に近く、三本のみで

検討すれば、寛永版は元亨版の漢字ひらがな混じりのものを漢字カタカナ混じりに変更したと考えられる。しかし、寛永版に先行する漢字カタカナ混じりの法然和語文献の存在が確認され、寛永版『和語燈録』成立の問題とともに、③のような形態が考えられるようになってきた。⁽²⁾

本書もまた、ひらがな系の元亨版とは形態を異にする、漢文系或いはカタカナ系法然和語文献として興味深い文献と認めることができる。

さて、本書が直接『和語燈録』に関連するものであるが、『和語燈録』の一部を抜粋した、西往寺本のような形状ではないので、にわかには決しがたい。しかし、後述するが、「往生要義抄」や「禅勝房教化」は『和語燈録』初出の文献であるし、それらと内容が一致する『和語燈録』の「念仏往生要義抄」「禅勝房にしめす御詞」と、題目も一致する。また「十二問答」も『和語燈録』ではじめて使用される題目であり、本書が『和語燈録』の影響下にある可能性は極めて高いといわなければならない。もともと「十二問答」は、周知の如く、醍醐三宝院で発見された『法然上人伝記』（以下、『醍醐本』）にある「或時遠江国蓮華寺住僧禅勝房参上人奉問種々事上人一々答之」（いわゆる「禅勝房との十一か条問答」）や、親鸞の手になるという『西方指南抄』の「或人念仏之不審聖人二奉問次第」とバラレ

ルな文献だが、『醍醐本』のそれは漢文であり、『西方指南抄』のそれは漢字カタカナ混じりの形態をなし、いずれも問答が十か条である。『和語燈録』ではじめて問答が十か条増広されるのである。本書が『和語燈録』の影響を強く受けている可能性が高い、理由の一つである。

また、本書の「十二問答」は、「進行集十二問答」と題されている。「進行集」といえば我々は『明義進行集』を連想する。しかし、『明義進行集』には「十二問答」に該当する記述がない。『明義進行集』は二巻と三巻しか発見されておらず、あるいは第一巻にその記述がある可能性もないではないが、予測の域を出ない。それよりも、「十二問答」が、「進行集」という名で呼ばれる伝承があつたか、あるいは、「進行集」という題目のついた未見の書物が存在し、その中に「十二問答」が所収されていたか、という可能性があるのである。これについては後に述べる。

さて、我々は、本書が漢文形式でかかれていることに注意しなければならない。先に、本書は『和語燈録』の影響を受けている可能性が高いと述べたが、もし『和語燈録』の影響を受けているとして、ではなぜ、和語で記述されているものをわざわざ漢文形式にして書写したのであろうか。そもそも了慧は『和語燈録』の編集について、「やまとことはは、その文見やすく、

その心さとりやすし。ねかはくは、もろくの往生をもとめん人、これをもて燈として、浄土のみちをてらせとなり。」（『和語燈録』第一巻）と、序文に述べ、元亨版の形態がどうあれ、了慧の『和語燈録』原本が、既に和語であつたことを推定させる。ということは、了慧の意図をくみ『和語燈録』を書写するならば、それをわざわざ漢文に変更する、ということは極めて考えにくいといえる。この展開から導き出せる結論は、本書の元になった資料は『和語燈録』か或いはその影響下にあるものではなく、了慧が『和語燈録』を編集する以前に存在するものか、或いは、『和語燈録』とはまったく別系統をたどるものではないか、ということになる。

その可能性を高める事柄がある。先述の如く『醍醐本』の「或時遠江国蓮華寺住僧禪勝房参上人奉問種々事上人一々答之」は漢文であることである。要するに「十二問答」は初期の段階では漢文であつたものを、伝承過程で和語に変化していく。もちろん、『醍醐本』と『西方指南抄』の關係は微妙であるが、ともかく『醍醐本』から、『和語燈録』へは、漢文形式から和語に移行したといつてよいであろう。同様のことが「往生要義抄」「禪勝房教化」にもあつたのではないか。

さらに、本書の読み下したものと、『和語燈録』を詳細に検討すると、やはり別系統ではないかと思わせることがある。一

字一句の異同は枚挙に遑がないが、単なる誤写や単なる増広削除とはいいたい特徴的なことを挙げてみよう。⁽³⁾

本書、三帖表、

疑(ヒテ)云ク、此(ノ)条尚不審也。其(ノ)故ハ、女人ニモ近(ツ)カス、不浄ノ食モセス申サン念仏ハ、定(メ)テ勝(スクレ)ヘシ。功德争(カ)等(シカル)ヘキヤ。

元亨版、二卷六帖表、

疑ていはく、この條なを不審也。そのゆへは、女人にもちかつかす、不浄の食もせずして申さん念仏は、たとかるへし。朝夕に女境にもむつれ、酒のみ、不浄食をして申さん念仏は、さためておとるへし。功德いかてかひとしかるへきや。

本書、六帖裏

往生ノ心誠ニテ、我身ヲ疑(フ)コト無クテ来迎ヲ待ツ人ハ、是レ三心具足ノ念仏ト申ス也。

元亨版、二卷十三帖表

往生の心ま事にて、わか身をうたかふ事なく来迎をまつ人は、これ三心具足の念仏申す人なり。

本書、七帖裏

互ニ順逆ノ縁空(シ)カラス、一仏浄土縁(ト)為シ、

元亨版、二卷十五帖表

たかひに順逆の縁むなしからずして、一仏浄土のともたむ。

これらは皆、いずれも単なる誤写とはいいたい。この他にも、本書に特徴的な漢字や熟語がある。「又」「また」が本書では一貫して「亦」を使用するし、「はげむ」が本書では全体を「策ム」で統一している。「かかる」は「纂ル」と表記され、「心得る」などの「心」は「意」の字を使用する。「意」については、三帖裏に「心ニハ思(ハ)サル事ノミ思ハレテ」とあつて、たった一箇所「心」の字を使用する。これは、当然のことではあるが、意図的に「意」に統一したわけではなく、書写者が、本書のもとになるものを忠実に書写したことを意味しているであらう。そうなれば、本書に特徴的な部分も重要な価値を有することになるう。

以上のようなことから、本書の存在が投げかける問題は興味深いものといえるのである。

さらに、「十二問答」の問者についてであるが、本書には「隆寛律師問ト云上人ノ答」と明記されている。「醍醐本」のそ

それは、「或時遠江国蓮華寺住僧禪勝房参上人奉問種々事上人一々答之」とあるように禪勝房であり、『西方指南抄』のそれは、「或人念仏之不審聖人二奉問次第」とあるように、特定されていない。元亨版『和語燈録』には「この問答の問をは進行集には禪勝房の問といへりある文には隆寛律師の問といへりたつぬへし」（寛永版、正徳版も同記述）とあり、すでに了慧の時代に、正確な伝承がなかったことをうかがわせる。しかし『西方指南抄』で「或人」とはいうものの、禪勝房であるとか、隆寛であるとかいう伝承はあつたわけである。本書が隆寛説をとるものの、これが了慧のいう「ある文」に相当するのか、というところでもない。了慧は、「進行集」では禪勝房の問いだといふのであるから、「進行集十二問答」と題する本書とは非常に矛盾する結果を生むことになる。以上のようなことから、少なくとも了慧が確認した「進行集」でもなく、了慧が見た、隆寛説を主張する書物でもない、しかも『醍醐本』や『西方指南抄』でもない、新たな史料であるといえよう。

この「進行集」についても、問題がある。先述したが、「進行集」といえば我々は『明義進行集』を思い浮かべる。しかし現在発見されている『明義進行集』の二、三巻には、当該記述がない。或いは未発見の一卷にその記述があるのかも知れないが、『明義進行集』の形態から判断して、一卷には法然の伝記

が記述されていると予想され、十二問答が入っていることは考えにくい。了慧のいう「進行集」については、そういう事例が他にもある。

『和語燈録』第五巻「諸人伝説の詞」は、さまざまな法然の弟子たちが伝える、法然の言葉をまとめたものであるが、了慧は二十八項目あるすべての言葉に対して、出典を記している。その中に「進行集」が十項目登場する。しかし『明義進行集』に実際含まれているのは一項目だけである。これらは「諸人伝説」による法然の言葉をまとめたものであるから、法然の伝記として述べられることはないと考えてよい。よって他の九項目が、未発見の『明義進行集』第一巻に所収されている可能性は低いであろう。了慧は『明義進行集』ではない、別の「進行集」を見ていたと考えられるのである。

次に考えられることは、今ある文献の中で、いずれかのものが「進行集」と呼ばれていた、ということであろう。了慧は「十二問答」の問者を、「進行集」によると禪勝房だといふのであるから、一問答足りないとはいえず、禪勝房の問いだとする『醍醐本』がそれに該当するのではないか、と思われる。確かに「諸人伝説の詞」でも了慧が出典を「進行集」とするものと、『醍醐本』の「一期物語」が、八項目一致する。しかし、すべてが一致するわけではない。一致しない二項目の一つは、先の

『明義進行集』に実際に含まれているもの、今一つはいずれにも該当しないものである。以上のようなことから、『醍醐本』を『進行集』と呼んだとは決していえない。

ここで改めて本書の「進行集十二問答」という題目を考えると、ある『進行集』という書物の中の「十二問答」、という意味を示しているのではないだろうか。とすれば、『醍醐本』や『明義進行集』ではない、別の『○○進行集』というような、現在未発見の、法然の言葉を集めたような書物があつて、それを参考して了慧は『和語燈録』を編集したし、本書の元になったものもそれから抜粋した。或いは、『醍醐本』や『明義進行集』もそこから法然の言葉をもってきた、という予測も可能ではなからうか。だからこそ、了慧の『進行集』が『醍醐本』や『明義進行集』と一致するのであるし、本書の題目の意味も首肯できるものとなる。いずれも予測の域を出るものではないが、本書や、現に存在する史料などから可能性を挙げてみたまでである。

五、むすび（本書の価値と今後の課題）

これまで重ねてきた愚論をまとめておく。まず第一に本書は、元亨版『和語燈録』と寛永版『和語燈録』の、約三百年の

隔たりを埋める数少ない法然和語文献の写本として貴重である。筆者は、寛永版が、単に元亨版の漢字ひらがな混じりの形態を、漢字カタカナ混じりの形態に変更しただけのものとは思っていない。寛永版の成立について非常に興味を抱いている。寛永版が参考にした『和語燈録』はどんなものなのか。その鍵が漢字カタカナ混じりの法然和語文献であろうと思われる。第二に本書は、『和語燈録』との比較により、これまで伝承されている『和語燈録』の写本刊本系統とは別のものと考えられる。その意味でも本書は貴重であり、さらなる「十二問答」の総合的な校訂検討により、本書の位置付けがなされていくであろう。『進行集』の問題ともからめ、今後も取り組んでいくつもりである。

さらに今後の課題として重要なことは、未だ発見されずに眠っている法然の文献の写本刊本を発掘していくことであろう。先学の努力により、法然の実像は明らかにされつつある。しかし、不明な点も指摘できることは否めない。より事実としての法然の思想や人となりを求めるには、もはや現在までの史料では限界があるといわざるを得ない。さまざまな法然の史料やその周辺の史料がより多く発掘され、それらにより総合的な法然の実像が百パーセント明らかにされるため、我々は意を注がなければならぬ。

付記

本書の閲覧とマイクロフィルム複製を許可された、西本願寺当局の高い見識とご理解に心から感謝する。また、諸手続きなどに力を傾けられた、佛教大学総合研究所の諸氏ならびに関係者に敬意を表すものである。

〔註〕

(1) 最近の法然研究で、注目されるところでは、末本文美士 袴谷憲

昭 梅原猛 阿満利麿 平雅行 宇高良哲 中野正明 岸一英 安達俊英 善裕昭 曾根宣雄 林田康順 各氏であらう。また、近年、中野正明を中心に、華頂短期大学において法然上人研究会が開催されてきた。『西方指南抄』の輪読を通じ、さまざまな問題が提示され、検討され、参加者各位の専門的興味により、法然に対して実に多様なアプローチがなされていた。筆者も非常に刺激されたが、中でも岸一英に啓発され、法然研究における現在までの文献発掘の不十分さ、その不十分の上に成り立つ法然思想研究の危うさ、不透明さを痛感し、反省させられる。

(2) 中野正明著『法然遺文の基礎的研究』（一九九四年三月 法蔵館刊）に詳しい。また、寛永版に先行する漢字カタカナ混じりの文献に関して、伊藤真宏稿「光徳寺蔵『黒谷聖人御消息』について」（『佛教大学仏教学会紀要』6）、「光徳寺蔵『法然聖人御詞』について」（『法然上人研究』6）参照。

(3) 本来は『和語燈録』も元亨版と寛永版と正徳版が一致しているわけではないので、三本と同時に本書の異同を検討すべきだが、紙面の都合もあり、便宜上、元亨版との異同で特徴的な部分のみ、挙げておく。また、十二問答に関しては、『醍醐本』所収本、『西方指南

抄』所収本、光徳寺蔵『法然聖人御詞』（伊藤稿「法然上人研究」6参照）、「和語燈録」三本、そして本書と、対照すべき写本刊本が自分の目で確認できるようになった。さらに康永二年（一二四三）祐玄書写本というものが存在するのであるが、その原本の所在が不明である。藤堂祐範が、昭和十五年に京都市内の某古美術商主所蔵の祐玄写本を、書写されたという。原本ではないが一見すべきものである。これらすべてを検討し、後日発表の予定である。

